

WPS（女性，平和，安全保障）特別コロキウム

—音楽がつなぐ平和とジェンダー—ウクライナからの祈り—

多文化公共圏フォーラム第14回報告—

国際学部 高橋若菜・中村 真・松村史紀・清水奈名子・李 亜姣
公益財団法人 国際フォーラム 高畑洋平・伊藤和歌子

2025年11月5日、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターは（UU3Sプロジェクト）は、日本国際フォーラムおよびグローバル・フォーラムとの共催として、「日本の強みを生かした『女性・平和・安全保障（WPS）』における貢献の在り方研究会」（外務省外交・安全保障調査研究事業）の協力のもと、WPS特別コロキウム「音楽がつなぐ平和とジェンダー—ウクライナからの祈り—」を開催した。本コロキウムは、国際学部専門科目「ジェンダー論」（主担当：李亜姣助教）の公開授業とも連動し、対面・オンラインのハイブリッド形式で実施され、学生、市民、研究者ら100名を超える参加があった。

開会にあたり、中村真・国際学部長は、本企画が研究や教育を市民社会に開き、国際社会と結びつける大学のプラットフォームとしての役割を体現するものであると宣言した。紛争や災害の影響を最も強く受けるのが女性や子どもなど社会的に弱い立場の人びとであることを踏まえ、多様性を掲げる本学にとって、ジェンダーの視点とWPSは不可欠であると強調した。

続いて、学外からの開会挨拶として登壇した高畑洋平・日本国際フォーラム常務理事は、外交とは、政府間交渉に限られたものではないとの問いを会場に投げかけた。その本質は、「他者と関係を築く力」そのものであるとし、市民一人ひとりの対話や理解の積み重ねが「民間外交」となりうることを示した。WPSは、暴力の現場で女性が声を上げ、社会の再建を担ってきた経験を安全保障の中核に据える理念であ

る。誰もが平和をつくる主体になりうるという包摂的な考え方でであると提示した。

基調講演では、ウクライナ出身のバンドウーラ奏者・歌手であるカテリーナ氏が、自身の人生史を語った。出生地はチェルノブイリ原発事故の被災地域であり、幼少期に家族とともに避難生活を経験した。避難者の子どもとして学校で差別や孤立を経験する中、音楽団への参加が支えとなり、音楽活動を通じて社会と関わる道を見いだしてきた。10歳で日本を訪れた際に感じた「安全で心の温かい国」という印象が、日本で音楽を続けたいという夢につながり、2006年の来日以降、家庭生活と両立しながら18年以上にわたり活動を続けているという。現在は自身の会社や一般社団法人を設立し、日本とウクライナで困難に直面する人びとの支援にも取り組んでいることが伝えられた。「誰に何を言われても、自分のやりたいことを続ける」という言葉は、主体性と尊厳を守る姿勢として参加者に強い印象を与えた。



続く、フロアとの対話では、夢を支える原動力や、地域で暮らす外国人との関わり方につい



て質問が寄せられた。カテリーナ氏は、挨拶や小さな交流から関係を築くことの大切さや、戦争の記憶に配慮しながら相手の良い面から語り合う姿勢を提案した。

コメントとして、清水奈名子教授は、戦争後に生じる差別や排除の問題をジェンダーの視点から指摘し、女性や子どもの声が国際政治の中で十分に聞かれてこなかったことに言及した。一人の女性の経験に耳を傾けることが、遠回りであっても理解と公共的想像力につながると述べた。松村史紀准教授は、愛着のあるものを持ち続けることの重要性に触れ、学問においても「役に立つこと」と同時に「自分が大切にでき

る対象」を持つ意義を指摘した。

終盤には、バンドウーラ演奏が行われ、「ウクライナ」「イマジン」「翼をください」が披露された。音楽という非言語的な表現を通じて、戦禍にある人びとへの祈りと平和への希求が共有され、会場は深い共感と静かな連帯に包まれた。

閉会にあたり、高橋若菜センター長は、平和とは単に戦争がない状態ではなく、人を思いやる関係性の中にあると述べ、安全保障を暮らしや文化、心の問題として捉え直す必要性を強調した。事後アンケートでは、カテリーナ氏の生き方や言葉が最も印象に残ったという声が多く寄せられた。また、避難児童への差別の経験が、日本の福島原発事故後の避難者の状況と重ねて受け止められ、戦争や災害が女性や子どもに共通して深刻な影響と分断をもたらすという認識が共有された。弱い立場の人びとを批判するのではなく、支え合う社会を築く必要性を感じたという記述も多かった。

総じて、本コロキアムは、WPSを抽象的な国際規範としてではなく、市民の経験と結びついた公共の課題として捉え直す試みであり、多文化公共圏センターが目指す「問題を不可視化せず、当事者を孤立させない公共圏」の理念を具体的に示す場となった。

